小特集

荒尾市出身
夭折の天才詩人

少女詩人　海達公子

夕日

もうすこしで
ちっこうの
さきはいるお日さん
がたにひかって
まばゆい
まばゆい

↑高瀬高等女学校時代の海達公子　　写真提供：社会教育課（荒尾市立図書館所蔵）

大正デモクラシーの最中に生まれ、短い生涯を荒尾で生きた少女詩人の名は、海達公子。

彼女は父の指導のもと、詩の才能を開花させた。公子の詩は北原白秋ら著名な文学人から絶賛され、一躍時の人となった。

親しみやすい公子の自由詩はとても短く、日常の風景を鋭い視点でとらえ、簡潔に表現している。

研ぎ澄まされた感性を持つ少女詩人の詩を、多くの人に知ってほしい――。

時の流れの中で埋没しようとしていた公子を、発掘した人がいる。荒尾の誇りとして、彼女と詩を市内外へ発信している人たちがいる。

多くの人たちの思いを受け、彼女はいま再び、脚光を浴び始めている。

3月26日は、海達公子の命日だ。

荒尾の少女詩人の面影を偲びながら、彼女の詩が伝えてくる、瑞々しく鋭い感性が持つ「力」を感じてほしい。

←四山神社境内にある公子の一号詩碑「夕日」

夕日　「赤い鳥」大正 13(1924)年 9 月号 北原白秋 選　＊ちっこう…築港　＊がた…干潟
ばら　西海日日新聞　大正 14(1925)年 10 月 5 日　若山牧水 選
おみや「赤い鳥」大正 13(1924)年 12 月号　北原白秋 選

ばら

まつかい
まつかい
ばらの花　　おみや
目にはいって
ゐるうちに　　おみやのもりから
目つぶって　　たん　たん　たん
母ちゃんに　　おみやのたつおと
見せにいこ　　たん　たん　たん

海達公子　かいたつきみこ

略歴

大正5（1916）年8月23日、長野県で生まれる。本籍は徳島県海部郡阿部村。

大正12年（1916）に荒尾北尋常小学校（現・荒尾第二小学校）に入学。同年、詩作を始める。

翌年、日本の近代児童文学に大きな影響を与えた児童雑誌「赤い鳥」に、「ひし」や「夕日」などが掲載され、選者・北原白秋から「珍しい詩才の持ち主」と選評を受ける。

昭和4（1929）年4月に熊本県立高瀬高等女学校（現・玉名高校）に入学。この頃、短歌の創作を始める。

公子の作品は掲載雑誌70種54編にも及ぶといわれ、全国にその名が轟き、与田準一や若山牧水、北原白秋ら著名な文化人と親交を深めた。

昭和7（1933）年3月16日、女学校の卒業式後に虫垂炎で倒れ、帰宅後に腹膜炎を併発。26日に死去。享年満16歳。

生前にまとめられた童謡集に「お日さん」「金の雲と雀」がある。

公子は天才と呼ばれた努力の人。詩を教材に、感性を身につけて

規工川　佑輔　さん

きくかわゆうすけ ●昭和4年生まれ、玉名市在住。海達公子研究の第一人者。「評伝　海達公子」（熊日情報文化センター刊）著者。

海達公子は、一緒に暮らしていた叔母と同級生です。二人は仲が良く、互いの家を行き来していました。我が家に泊まりに来たこともありました。叔母が『カイタツさん』と呼んでいる声が、幼い頃からずっと耳に残っていました。

私は教員として有明小学校に赴任し、市立図書館で何気なく『赤い鳥』復刻版を読んでいて驚きました。『カイタツさん』の作品がたくさん掲載されていたんですね。その頃ほとんど知られていなかったこの少女詩人を私が発掘しなければと、使命感を覚えました。それから論文などを発表し、評伝もまとめました。

北原白秋らに認められ、天才ともてはやされた公子でしたが、実際は大変な努力家でした。

荒尾では、公子の詩を教材に、子どもたちに詩を学んでもらいたいですね。そして公子のような豊かな感性を身につければ、きっと世の中は良いものになると思います。

公子を育った地域から全国に発信。多くの人に訪れてほしい

松山　厚志　さん

まつやまあつし ●昭和 12 年生まれ、日の出町在住。毎年「海達公子まつり」などを主催している一般社団法人海達公子顕彰会の代表理事。

一般社団法人海達公子顕彰会の設立は、二小元気会の「地域活性化部会」で地元出身の公子の顕彰事業に取り組んだことがきっかけでした。そのときから、いずれは元気会から独立し、顕彰事業を行う団体を立ち上げたいと考えていて、2年前に設立しました。

公子の詩は、短い詩の中に深い味があり、感性の鋭さと純粋な心を感じることができます。荒尾の宝だと思います。

顕彰会はこれからも、あせらずじっくり活動を重ねていきます。そして5年後の生誕100年を盛り上げたいですね。それまでには現在11基ある詩碑を、30基に増やしたいと考えています。

そして全国の人たちに公子と公子の詩を知ってもらい、荒尾を訪れてほしいんです。そのためには、公子について、いろんな立場のたくさんの人に、興味を持ってもらいたいと思っています。

※3月20日から「海達公子まつり」が開催されます。詳細は16ページをご覧ください。

あたりまえの日常を「宝」に変える感性の力

海達公子の詩の感動は、じわじわと滲むように訪れる。詠まれているのは、普段何気なく目にし、経験するようなあたりまえの風景だ。見たままを単純に表現しているようで、実はそう簡単なものではない。何度も読むうちに、その情景は心にしみて来る。

今、海達公子は、両親のゆかりの地である徳島を始め、全国から再び注目されつつあるという。より多くの人に、公子の詩が読まれ始めている。偏に規工川さんや、松山さんを始めとする顕彰会の皆さん、出身校・二小の関係者や地域の皆さんの尽力の賜物だ。

日常の情景を言葉の芸術に高めた公子は、詩を通じて私たちの身の回りにあるあたりまえのものが持つ可能性と、感性の無限の力を示してくれているように思える。

豊かな感性は、日常を芸術に変える力を持つ。ならば、あたりまえの日常を輝かせ、価値ある「宝」に変える力は、私たち一人ひとりの感性――心のあり方に宿っていると言えるのではないだろうか。

参考文献：「評伝　海達公子～「赤い鳥」の少女詩人～」（規工川佑輔 著 / 熊日情報文化センター 刊）、「海達公子遺稿詩集・復刻版」（荒尾市文化連合会 刊）、「海達公子童謡集」（トライ出版 刊）　※全て荒尾市立図書館に所蔵しています。